

聖書:テサロニケ人への手紙第一 4:13~18

説教題:いつまでも主とともにいる

日時:2025年4月20日(イースター記念朝拝)

今日の箇所は「眠っている人たちについては」と始まります。この「眠っている人たち」とは、ここでは信仰を持って先に死んだ人たちのことです。世の中一般でも「死」を婉曲的に「眠り」と表現することがあります。よく「永眠」という言葉が使われます。しかしクリスチャンの場合はこの言葉は使いません。永遠に眠るのではないからです。聖書が語るクリスチャンの眠りは一時的な眠りです。やがて起き上がるまでの、すなわち復活までの一時的な眠りです。その眠っている人々のことでテサロニケ人たちは悲しんでいました。なぜでしょうか。それはこの手紙の中心テーマであるイエス・キリストの再臨と関係していました。彼らは主イエスが栄光の内に再び地上に来られる再臨の日を待ち望んでいました。この手紙の1章8~10節に彼らの信仰がこの地方のあらゆる場所に伝わっていると語られていますが、その10節に「御子が天から来られるのを待ち望むようになった」と述べられています。1章3節にはテサロニケ人に関するパウロの感謝の言葉の中に「望みに支えられた忍耐」があげられていますが、彼らは主の再臨という希望に支えられた忍耐という特徴を示して信仰生活を送っていました。これは全く正しい賞賛すべき姿でした。

しかし主の再臨を強く待ち望むあまり、いくつかの誤りも彼らには見られたようです。その一つは今日の箇所直前の11~12節に暗示されています。ある人たちは主の再臨が近いと考えて熱狂的に待ち望むあまり、仕事をせず、結果的に怠けていたようです。ですからパウロは11節で「落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くことを名誉としなさい」と言いました。一方で別の問題もありました。それが今日の箇所に書かれている内容です。これまで一緒に主の再臨を待ち望んで歩んだ兄弟姉妹の中に、その日を迎えずに死ぬ人たちが出て来ました。その死に接して彼らの中には動揺が広がっていたようです。先に眠った彼らは主の再臨の栄光にあずかれないのか。ともにその日を待ち望んだのに彼らはその祝福から漏れてしまうのか。その結果、彼らは救われないのか。このような混乱の中である人々は望みのない他の人々のように、つまりキリスト教信仰を持たない人々のように悲しんでいたようです。そこでパウロは「兄弟たち、あなたがたに知らずにおいてほしくありません」と言って、知るべき真理を語ります。それはイエス・キリストの復活と深い関わりを持つ話です。今日はこの箇所を通して主の復活を感謝し、主の復活が私たちにもたらす祝福を心に刻んで、あるべき歩みへ強められて行く者たちでありたいと思います。

まずこの箇所の話の基礎となることが14節前半にあります。それは「イエスが死んで復活された、と私たちが信じているなら」という部分です。先にクリスチャンの死が「眠り」と表現されていることを述べました。この「眠り」には、やがて定められた時が来たら起きるという意味が込められています。ですからそれは一時

的な状態です。また眠りは一般的に言って私たちに害をもたらしません。逆に益をもたらします。クリスチャンにとっても死はそういうものであるということも暗示しているでしょう。しかしイエス様の死についてはここで「死」と表現されています。ここも 13 節と同じく「眠り」と置き換えても良いでしょうか。答えは No! です。ここは「死」と表現するのが正しい、またそうでなければなりません。死とは何でしょうか。死とは私たちの罪に対する罰です。ローマ人への手紙 6 章 23 節に「罪の報酬は死です」とあります。本来は私たちがこの報いを受けなければならませんでした。しかしその死をイエス様が身代わりとなって死んでくださいました。ですから本当の意味での死を死んだのはイエス様だけです。そのイエス様の身代わりを通して私たちの死は眠りとなったのです。そしてイエス様はその身代わりの死において罪の価を完全に清算して復活されました。そのことを「信じているなら」とパウロは語り、次のように続けます。「神はまた同じように、イエスにあって眠った人たちを、イエスとともに連れて来られるはずで。」 イエス様を信じて死んだクリスチャンは死後、その魂がイエス様とともにあると聖書で言われています。イエス様は十字架上でイエス様を信じた犯罪人の一人に「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」と言われました。肉体は十字架に残り、その後、墓に葬られても、その魂は死後直ちにイエス様とともにあるという状態にあると言われました。パウロもピリピ人への手紙 1 章 23 節で「私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです」と述べて死の直後からキリストとともにいるという、より好ましい状態に移行することを述べています(Ⅱコリント 5 章 8 節も参照)。主を信じて先に天に召された方々は、そのような幸いな状態にあります。その人々を神はイエスとともに連れて来ると今日の 14 節に言われています。つまり主とともにある方々は、主とともにあるという状態のまま再臨の場へと連れて来られるのです。ですからその人たちは主の再臨の場に居合わせないとか、その祝福にあずからないというようなことはないと言われているわけです。

パウロはそのことを 15 節で主のことばに訴えて述べます。聖書の中にこれに該当する言葉が見当たらないため、このことばをパウロがどのように知ったのかははっきりしません。パウロたちが直接受けた言葉か、あるいは当時の彼らが手にしていたイエス様の語録集のようなものにあっただけでしょう。その主のことばに基づいてパウロは 15 節で「生きている私たちは、主の来臨まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません」と言います。つまり主の再臨の日まで地上に生きている人たちの方が有利であるということはない。先に眠った人たちがいる特権を失うというようなことはない。彼らも十分に再臨の日の祝福にあずかるのです。その日まで地上に生きていようと、そうでなかりと、それで何らかの祝福を失うことはないということです。

では眠っている人たちは再臨の日にどのようにその祝福にあずかるのでしょうか。そのことが 16 節以降にもう少し詳しく語られます。まずその日、主ご自身が天から下って来ると原文では先に言われています。代理人が先に現れるのではありません。主ご自身がまず来られるのです。その際、「号令と御使いのかしら

の声と神のラッパの響き」が起こります。これら三つは別々の出来事を指すのか、それとも一つの出来事を色々な面から語ったものなのか議論があります。一般に号令とはヨハネの福音書 5 章 28 節でイエス様が「このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです」と言われたところの「子の声」、すなわちご自身により頼む者たちをいのちによみがえらせるイエス様の力ある声を指すと考えられています。また二つ目の御使いのかしらとは誰かを巡って議論がありますが、マタイの福音書 24 章 31 節に「人の子は大きなラッパの響きとともに御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで四方から、人の子が選んだ者たちを集めます」とありますから、この奉仕と関わる御使いのことだろうと思われています。そして三つ目のラッパは今読んだ御言葉にもありました。ラッパは民を招し集める時、戦いで民を率いる時、自由や解放を告げる時などに用いられていて、ここでは主の勝利を高らかに宣言し、神の民を救いへと集める合図としてのラッパと考えられます。

そしてまず起こることは「キリストにある死者のよみがえり」です。つまり眠っている人たち、そして魂の状態で再臨の場へと連れて来られた人たちの復活が先なのです。新しいからだが与えられ、魂と結合します。「それから」と 17 節にあります。その後で、生き残っている私たちが、彼ら(すなわち復活した人たち)と一緒に再臨の祝福にあずかります。ここに詳しく書かれていませんが、I コリント 15 章 52 節を見ると、その日に生きていた人はたちまち一瞬のうちに変えられると言われています。現在の地上のからだはそのままでは天国を継げません。新しい朽ちないからだをいただいて、来たるべき世の祝福にあずかります。そのような変化がラッパが鳴るとたちまち起こると言われています。ですから眠っている者たちの復活と、その時生きていた信者たちが変えられる出来事は、ほんの一瞬のうちに、瞬きする間に起こるのでしょうか。ただしその中にも、眠っていた信者たちの復活が先行するという順序のあることが言われているのです。その意味で、彼らがこの日の素晴らしいイベントに参加できないというようなことはないのです。彼らの復活が第一プログラムなのです。

そして彼らと生き残っている者たちは一緒に再臨の日の栄光にあずかります。ここにいくつか注目すべき言葉があります。まず一つ目は「雲に包まれる」ということです。聖書において雲は神の臨在を象徴するものです。シナイ山で十戒が授けられた時も密雲がそこにありましたし、幕屋が完成した時、神殿を奉献した時も、雲がそこに満ちました。あるいはイエス様が高い山で栄光の姿に変貌した時も雲が人々を包みましたし、イエス様が天に昇って行く時も雲に包まれて上って行きました。そのような神の民が恐れ、また憧れた神の臨在のただ中に入って行くという意味なのでしょう。

二つ目に「引き上げられ」とあります。これは力づくで捕らえ移されるという意味の言葉です。同じ言葉は使徒の働き 23 章 10 節でパウロが暴動のただ中で、引き裂かれてしまうのではないかと恐れた千人隊長

が彼を引っ張り出したという時に使われています。あるいはⅡコリント12章でパウロが第三の天にまで引き上げられた時のことを語っている箇所でも使われています。そのように特別な力で引き上げられるということが起こると言われています。

そして三つ目に「空中で主と会う」とあります。「空中」という言葉で思い起こされるのはエペソ人への手紙2章2節の「空中の権威を持つ支配者」という言葉です。すなわちサタンのことです。ユダヤ人の考え方では神が住む「天」と人間が住む「地上」の間に悪魔が支配権を持つ「空中」という領域が考えられていました。その空中で主と会うとは、主が悪の領域においても完全な勝利を収められたことを意味すると考えられます。その空中で信者は主と会い、悪への勝利を祝い、あらゆる苦しみや艱難から解放されたことを祝うのです。

ちなみに空中で主と会った後はどうなるのでしょうか。ある人たちは主はクリスチャンたちを天へと連れて戻り、その後、地上は大患難時代に入ると考えます。つまりこの時の主の再臨は空中再臨であり、地上に来たわけではない。その再臨は秘密裡に行われ、信者たちは忽然と地上から姿を消し、地上は大混乱に陥って悔い改めの期間が与えられるとします。レフトビハインドという映画はこのような解釈に基づいて作られています。しかしキリストの再臨は決して秘密裡に行われるものではありません。16節に「号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに」これが起こると言われました。ですからすべての人に明らかな仕方でこれは起こるのです。誰かに教えてもらわなければ気がつかないというような出来事ではないのです。ヨハネの黙示録1章7節にある通り、すべての目がキリストの再臨を見るのです。またここで空中で主と会うという部分の「会う」という言葉は、王や高官がある町を公式訪問する際、町の代表者たちが町の外へ出て歓迎することを表す専門用語です。そのように王や高官を出迎えた人たちは、その後、王や高官と一緒に町へ戻るでしょう。ですからイエス様を迎える信者たちも、その後、イエス様とともに地上に戻って来ると考えられます。

「こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります」とパウロは言います。ついに私たちの愛する主、愛する王と永遠にみそば近くに住む日が来ます。そしてここで大事なのが「私たちは」という言葉です。ここの「私たちは」には、眠っていた者たちと、再臨の日に地上に生きていた信者たちの両方が含まれます。つまり先に天に召された愛する者たちと以後ずっと一緒なのです。二度と別れることはないのです。その結びつきの中で永遠に主とともに生きるのです。パウロは最後に「ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい」と言います。ただ自分がこれを受け止め、自分の慰めとするだけではなく、これらの言葉をもって互いに支え合うように！強め合うように！と言っているのです。

私たちは今日の箇所から特に天に召された方々のことを思います。その方々は今すでに主とともにあります。そして神は主の栄光の再臨の日に、それらの方々の魂を、主とともにある状態のまま、主とともに連れて来られます。そしてまずそれらの方々に新しいからだを与えられて魂と結合する復活が第一イベントとして起こります。そして次にその日に生き残っている信者たちが、やはり新しいからだに変えられて一緒に栄光の雲の中へ引き上げられます。そして主が勝ち取ってくださったすべての祝福と一緒にあずかる者とされ、いつまでも愛する主とともにいる者とされます。このように主の再臨の日の出来事が私たちに教えられていることを感謝したいと思います。

また私たちは自分がいつ地上の生涯を終えて天に召されても何も失わないということを今日の箇所から学びます。たとえ自分の死のタイミングが他の人より早いとしても、それによって栄光に満ちた主の再臨の日の祝福がいくらかでも自分からはぎ取られるということはない。主とともにある状態のまま主の再臨の場に連れて来られて、まず自分の復活からすべてが始まるのです。そうしてその日の祝福を最初から全部味わう者とされるのです。

このような祝福に私たちが生きることができるのは私たちの主が私たちの身代わりに本当の意味での死を引き受け、死んでくださったからです。そしてその代償を完全に支払ってイースターのこの日にいのちによりみがえられたからです。このイエス様のみわざのゆえにイエス様を信じ、イエス様と結ばれている者たちは、地上の生を終える時、主にあつて眠り、やがて起き上がる者とされます。そして愛する者たちと再会を果たし、ともに永遠の命に生きる者とたちとされます。この救いを感謝して、この希望のうちに日々を歩む者たちとされたいと思います。今日の御言葉をもって互いに励まし合いつつ、やがて愛する者たちと主の再臨の栄光と一緒にあずかり、いつまでも主とともにいるという最高の幸いに入れられる歩みへ進んで行く者たちでありたいと思います。